

論文

和歌山大学観光学部遠隔教育「ハワイの観光開発」の事例に基づく研究

—外国語による遠隔授業を通じて検証する観光教育の方向性

A Case Study of Distance Education, “*Tourism Development of Hawai‘i*” at the Faculty of Tourism in Wakayama University : the Prospect of the Development for Tourism Education Discussed through the Distance Education Classes Given in Foreign Language

東 悦子¹、戸塚 敦子¹、ラッセル・ウエノ²、肥田木 元春¹

Etsuko Higashi, Atsuko Totsuka, Russell Uyeno, Motoharu Hidaki

1 和歌山大学観光学部、2 ハワイ大学旅行産業経営学部

キーワード：外国語による遠隔授業、観光教育、文化的背景知識による差異、ICTを活用した授業開発

Key Words : distance education in a foreign language, tourism education, perception gap, Faculty Development for the effective use of ICT

Abstract :

This is a case study of the course, “*Tourism Development of Hawai‘i*”, held in the first semester of the year 2008 in the Faculty of Tourism of Wakayama University. This is the first distance education class in English to be held in the faculty. Students acquired a great amount of special knowledge concerning Tourism, through many examples of tourism in Hawai‘i in English, by Russell Uyeno from the University of Hawai‘i.

Firstly, this paper gives a detailed description of the course: course syllabus, the content of DVDs, facilities, teaching staff involved in this course and so on. Secondly, the paper evaluates the effectiveness and difficulties of this kind of course. Furthermore we discuss some issues in order to improve the course for the next academic year.

In addition, we show a new aspect of the approach to Tourism both from the standpoint of education and a national policy of Japan.

1. はじめに

「和歌山大学にいながらにして、海外の観光教育先進大学による講義の受講」を可能にすることを目的として観光学部遠隔教育が開始された。様々な分野において、既に遠隔授業の取り組みがなされているが、本学観光学部では、遠隔授業という授業形態を活用することにより、グローバルな視点から、ハワイの観光開発の多くの事例を通じて、観光の理論と実践を幅広く学ぶことを目指している。このことは、単にハワイの事例を学ぶことに留まらないことは言うまでもない。英語という外国語をツールとして、海外の観光学を学ぶことに、もう一つの重要な意味が包含されている。

海外から日本を訪れるインバウンドの観光客数増加を図る戦略として観光庁が掲げる「憧れの地・日本」のイメージを構築する上で、日本の魅力を外国人に効果的に伝達する方

法の確立は不可欠である。その際のツールとして外国語、特に英語の運用能力が必要になるが、さらには、外国語による遠隔授業の中で生じる文化的背景知識による差異であるところの、perception gap（以下、ギャップと呼ぶ）を認識する点に、意味がある。つまり、異文化間の交流においては、言語上の表層的な理解に終わることなく、真の理解にいたる為に文化的背景の異なりを踏まえないといけないことの必要性を学ぶのである。このことは間接的にはあるが、我が国が掲げる「観光立国」の実現に不可欠な「文化の違いを超え日本固有の魅力を外国人に伝達する」方法や手法の開発につながるものと考えられる。

本稿の目的は、主として次の二点である。第一に、観光学部初の取り組みであった「ハワイの観光開発」について詳述し、その記録を残すことにある。加えて、そのことから見出

される課題を検討することである。具体的には、講座の内容はもちろんのこと、遠隔授業に不可欠なICTを活用した講義スタイルと技術的な点についても取り上げ、その課題を検討する。次に、授業者と受講者の両者の立場からの評価を取り上げ、本授業を通して、受講者がどのような成果をあげたのか、あるいはどのような困難を感じていたのかを検討する。以上のことは、次年度も開設予定である本授業を一層充実させることを目的としているが、長期的な展望の下、本学観光学部において段階的に導入が進められるだろう英語による遠隔授業の開発に具体的に資するものであると考える。

二点目に、文化的背景知識の異なりによって、実際に生じたギャップの例のいくつかを取り上げ、それを授業者と学習者の双方が認識することの重要性を明らかにすることで、グローバルな視点から、日本の魅力を外国人に効果的に伝達することができる方法や手法を身につけた人材の育成に通じる、観光教育の新たな側面を検討する。

さらには、「観光立国」の推進に観光庁が掲げる「憧れの地・日本」のイメージを構築する上でも、文化的背景知識による差異を理解することの重要性を示す。

2. 「ハワイの観光開発」授業の実際

2.1 授業の概要

2008年前期、和歌山大学観光学部において、専門コア科目の一つとして、「ハワイの観光開発（“Tourism Development of Hawai'i”）」が開設された。これは、ハワイ大学旅行産業経営学部（TIM：School of Travel Industry Management in the University of Hawai'i）のUyenoによる授業であり、和歌山大学観光学部初の遠隔授業であった。本授業の開設により、学生達は本学のキャンパスにいながらにして、ハワイ大学で教鞭をとっているUyenoの授業を受講することが可能となったのである。

「ハワイの観光開発」を開設するにあたり、和歌山大学側においては、東、戸塚、肥田木が、それぞれの経験に基づき、担当分野を生かして関わることとなった。東は、Uyenoが本学の遠隔授業科目を担当するにあたり、和歌山大学側の担当者となり、シラバスや評価のとりまとめ、そしてDVD授業の進行を担当した。戸塚は、15年に及ぶ米国在住経験とアメリカ合衆国初の女性州政府駐日代表（ハワイ州）という経歴を持ち、授業においては、英語の逐語的な意味は理解可能であっても、学生達には読み取ることが困難なことばの真の意味、及び、Uyenoの説明の背景にある文化の理解を促進するために、米国並びにハワイの社会・文化さまざまな分野における見識と豊かな経験から適宜助言を行った。

肥田木は、Uyenoの授業データの管理や資料の編集、DVDによる授業を提示するための機器操作全般を担当し、さらに授業を効果的に学習するための学習支援システム（LSM：Learning Management System）も管理し、ICTを活用した学

習環境を整えた。

本授業は、木曜日の3限（13:10～14:40）の時間帯で開設された。受講登録者は2回生34名であったが、実際に履修した人数は32名であった。

本授業の到達目的は二点あり、一点は、「講義内容を通して、ハワイの観光開発に関しての幅広い知識を得ること」であった。もう一点は、「英語のみで行なわれる講義を通して、キーワードを拾い上げながら必要な情報を捉える力を養う」ことであった。

授業計画としては、オリエンテーションが1回、それに続くテレビ会議が1回、Uyenoによる対面授業が3回、そして9回のDVDによる授業提供が予定され、実行された。以下に、Uyeno作成の授業計画を示す。

【Syllabus】

1. Orientation & Course Overview
2. Introduction to Course and Instructor (Teleconference)
3. Island Tourism (video)
4. Historical Development of Hawai'i Tourism (video)
5. Economic Context of the Tourism Industry in Hawai'i (video)
6. Overview of Major Issues in Hawai'i Tourism (対面授業 5月22日)
7. Marketing Hawai'i Tourism I (対面授業 5月24日)
8. Marketing Hawai'i Tourism II (対面授業 5月24日)
9. Current Status of Hawai'i Tourism (video)
10. Tourism Product Development I (video)
11. Tourism Product Development II (video)
12. Tourism Planning in Hawai'i I (video)
13. Tourism Planning in Hawai'i II (video)
14. Accommodations and Hospitality (video)
15. Examination or/and report

次に授業内容であるが、まず第一回目のオリエンテーションでは、シラバスを基に到達目標や授業計画を説明した。本学部の学生達は、海外インターンシップや留学への関心が高い。その点も踏まえ、キャンパスで、留学しながらにハワイ大学の観光学部教授の授業が受講できる利点を説明した。受講者の様子からは、その利点を理解したことが伺われたが、第一回目の授業の中で、複数の学生から、実際のところ、あまり英語を聞きとれない、しゃべれないという不安をかかえており、最後まで履修することが出来るかどうか心配であるという声が聞かれた。そこで、教員らは、英語の聞き取り方についてのポイントを具体的に示す等、受講者の不安軽減と前向きに取り組む姿勢を高めることに配慮した。またLMSによる自学自習の反復学習の機会を提供した。

次に第二回目のテレビ会議では、ハワイ大学のUyenoと映

像を通して対面した。Uyenoによる自己紹介で始まった。受講者は、やや緊張した面持ちであったが、クリアに発音されるUyenoの英語を聞き、概ね理解できているように頷いていた。続いて、受講者も全員が自己紹介をした。そのような最初のUyenoとのやり取りを通して、時には笑いが起こり、和やかな雰囲気となった。その後、本コースについて説明を受けた。

第三回目以降、DVD視聴による講義が始まった。DVDによる講義は、14回の講座のうちの9回を占めた。毎回授業前には、戸塚と東が打ち合わせを行い、授業の始まりに、東がその授業の進行の枠組みを示した。以下が、授業進行の枠組みである。

【授業の進行】

- ① 資料配布や出欠確認
- ② 視聴のための留意点や何について聞き取る必要があるのか、Uyenoが示している“Lecture Overview”を用いて、講義内容の簡潔な概観を行う。加えて、同氏が講座内容に関連して提示している“Questions to Consider”の確認を行う。
- ③ DVD本編の視聴
- ④ “Questions to Consider”に対する各自の考えを述べる、ディスカッションする、あるいは課題として各々が考えをレポートにまとめ、提出する。

以上のDVD授業においては、本学教員が適宜、受講者を励まし、理解の困難な点に解説を加え（詳細は、5. 参照）、より深く理解できるように援助した。DVD授業については、製作者Uyenoによる2.2を参照されたい。

本講座は、DVDの視聴を通しての講座が中心を成したが、Uyeno自身による3回の対面授業が含まれた。対面授業とDVD視聴による授業との大きな相違点は、授業者が学生の様子から学習者の理解を推し量り、適宜説明を加えたこと、そして、学生に十分な質問の時間が与えられたことであった。詳しくは、授業者Uyenoによる2.3を参照されたい。

最後に、受講者の評価方法であるが、出席50%、レポート50%と配分して総合的に評価した。出席レポートについては、講座開講中に英語または日本語で提出されたレポート数回分を30%とし、東が評価した。講座終了後、試験に代わる最終課題としてのレポートは、ハワイ大学に送信し、授業者Uyenoが評価（20%）した。最終課題の出題に関しては、Uyenoと東が相談の上、以下の設問を課した。

【ハワイの観光開発 前期試験について】

Topic for the final report instead of a term test

You had lectures about “Tourism Development of Hawai’i” from Prof. Uyeno. What topic interested you the most

among the lecture? First, choose 1 topic from the lectures and watch the DVD lecture again on the web site. Second, explain what you learned from the lecture you chose. Then write your opinion about how you could apply it to tourism in your own area. [Your report should consist of an introduction, body, and conclusion, 500 to 600 words. The deadline is July 30, 2008]

2.2 DVD授業について (The Content of DVDs)

授業者であり、DVD製作者でもあるUyenoが、DVD授業について述べる。(原文のまま掲載し、末尾に要約を加えた。)

The DVDs that were produced for this course were tapes of lectures given by the instructor, and were meant to be played in class and to be available online for student review.

The budget for this class did not allow for professional production of the DVDs. Thus, the instructor was responsible for the production of all DVDs, with some assistance from technical staff. In the future, improvements in equipment and production should improve the final quality of the DVDs. In particular, the audio quality of the DVDs can be improved. This is an important aspect of the production because of the use of English, and the difficulty that the students encounter in listening to the lectures.

The format of the DVD lectures needs to be discussed. There are several issues that should be examined: (1) Should the video include both the instructor and the powerpoint slides? For some distance courses, this is a standard practice. There are both positives and negatives to this practice, however, especially when the powerpoint presentations include lots of photos and videos (as some of our lectures do). Also, this format requires more production time, which increases both cost and possible delay in posting the videos to the web.

(2) Should the video be a “live” lecture in front of students?

A “live” lecture setting would enable the video to include shots of students’ faces as they listen to the lecture, or of student participation. This would undoubtedly make the video more interesting to the students at Wakayama. Again, however, this would require an additional person to control the camera, and significantly increase production cost and time.

Although we experienced a few technical issues at the beginning of the course relating to the file format of the video and its transmission from Hawaii to Wakayama, I believe that those issues have been resolved. The technical staff of Wakayama University should be recognized for their hard work and expertise in helping the instructor ensure that the

technical issues were resolved quickly.

DVDは、授業者が本講義の為に作成し、和歌山大学の講義において視聴された。また学習者が復習するためのオンライン（学習支援）システムであるLMSも開設された。予算の都合上、DVDの製作にあたっては、テクニカルスタッフの支援のもとに授業者が責任をもって製作したが、今後DVDの質をさらに高める必要がある。特に、音声面での質の向上が必要である。これは、講義が英語でなされるという点において、また講義が聞きとり辛い等の問題を生じさせないためにも重要なポイントである。

DVD授業のフォーマットに関して、何点か検討すべき点がある。

- (1) 授業者とパワーポイント資料の両方をその映像に含むべきか。この点は、概ね遠隔授業において標準的な技法になっているが、特にパワーポイントに写真やビデオを多用する際には（本講義でもそういう場合があったが）、利点も難点もある。さらに、このフォーマットでは、製作に時間を要し、費用もかかり、ウェブ上に映像を載せるのに遅延を生じる場合がある。
- (2) 映像は学生の前面で、ライブで講義されるべきか。ライブ講義のセッティングでは、映像に、講義を聴いている学生の顔の映像と学生参画の映像を含むことができ、これができるならば、和歌山大学の学生にとって、より面白い映像にできるだろう。しかし、この操作には、カメラを操作する人員が必要であり、費用と時間を増すことになる。

コース開設の当初、映像のファイル・フォーマットとハワイから和歌山への送信に関して、何点か技術上の問題があったが、和歌山大学側のテクニカルスタッフが、授業者をサポートし、迅速に技術上の問題は解決した。これは、スタッフの熱心な取り組みと専門的知識によるものである。

2.3 対面授業 (Face to face classes)

授業者であるUyenoが、対面授業について振り返る。(原文のまま掲載し、末尾に要約を加えた。)

The face-to-face (in-person) class sessions are an essential component of the class, and in my experience they significantly contribute to the quality of the student experience. One of the principles of effective education that has been consistently supported by research is that students perform better when they feel “connected” to the instructor. That is to say, they feel that the instructor knows them as individuals, and they know the instructor on a one-to-one basis.

Among other benefits, this enables students to “personalize” their efforts in the course: they are able to perceive their work (studying, preparing for tests, writing papers, etc.) as being something that will be evaluated by someone they know and, hopefully, trust. They are also able

to perceive the information they receive via lecture (and, indirectly, from readings) in the same way. Specifically, for example, the student might say to himself/herself: “This reading is difficult, but Dr. Uyeno has reviewed it and feels that it is important that I know this material.” This is a much better perspective than saying, “This reading is difficult, and I don’t understand what the author is trying to say.” The student will be much more motivated to persist in the first case, and also more inclined to connect the reading with the overall course. For these reasons, the in-person class sessions are important in developing among students a certain level of comfort and trust in the instructor. I do my best to present myself as an authority, but also as friendly, accessible, and trustworthy. Above all, I try to present myself as interested mainly in helping the students to do the best that they can do.

I believe that including an informal gathering with students, as we did after one of the class sessions, is very helpful for students as well. Although many students are hesitant to use their English, their questions were sincere and well considered. It also gave me a chance to speak with them at their level, rather than lecture to them. My only regret is that only a portion of the students was able to attend this informal session. Perhaps in the future, this activity could be scheduled partially during a class session, so that all students can participate, or at a time when students don’t have other activities to attend.

一連の対面授業は、本講座に不可欠で、授業者自身の経験から、受講学生の経験の質を高めるのに役立つと考える。効果的な教育の原理の一つとして、学生は、教員と“関わっている”と感じる時に、一層能力を発揮するとされている。すなわち、教員が個々に自分達を知っていると感じ、学生もマンツーマンの関係でその教員を知っているという関わりである。

また、前述の関わりによって、学生が講座において努力することを“自身の事として捉える”ことができよう。つまり、知合いの誰か、できれば、信頼している誰かに評価される事をする時、彼らは、自分のすべき事（勉強、試験の準備、論文を書くこと等）を自分のこととして認識できる。同様に、講義（間接的には、読書）を通して受け取る情報を自分のものとして認識できる。例えば、「リーディングは難しい。でも、ウエノ先生がそれをレビューしていて、この教材を私が分かっていることが重要だと思っている。」という方が、「このリーディングは難しく、筆者が何を言おうとしているのかわからない」というより、はるかによい。最初の事例では、学生はより頑張ろうと動機付けられるだろう。このような理由で、対面授業は、学生達に、一定の安心感と授業者への信頼を培うのに重要である。和歌山大学の対面授業において、オーソリティと

してのみでなく、親しみやすく信頼できる対象となるように配慮した。特に、学生が十分に頑張れるように支援しようと思っていることが伝わるように心がけた。

一連の対面授業の後で実際に行なった、学生との気軽な集まりを持つことも、学生達にとっては大変有効であると考えた。多くの学生は、英語を使うことに躊躇いがあるが、学生の質問は、真面目でよく考えられていた。また、気軽な集まりは、講義の場合よりも、授業者が、学生と同じ目線で話す機会ともなった。ただ残念であったのは、この気軽な会には、少人数の学生しか参加できなかったことである。今後、このような機会があれば、全学生が参加可能なように、一連の対面授業の間か、学生が他の活動と重複しない機会に実施するとよいだろう。



【授業風景】（写真左：DVD授業を視聴している学生達、右：Uyenoの対面授業）

3. 講義スタイルと講義の技術的改善点

3.1 講義スタイル

遠隔授業の開設と運用にあたっては、講義内容のみならず、ICTを活用した講義スタイルと技術的な問題も重要な構成要素である。ここでは、まず3つの異なる講義スタイルについて説明する。第一の授業スタイルは、テレビ会議システムを利用したリアルタイム双方向通信授業である（図1）。本遠隔授業の実施には、ポリコム社のテレビ会議システム（以下、ポリコムとする）を用いた。ポリコムによりハワイ大学Uyenoのリアルタイムの映像・音声を教室既設のプロジェクターよりスクリーンへ投影（画面中に子画面で和歌山大学側の映像も表示する）し、事前に送られたパワーポイント資料は別の大型液晶ディスプレイに表示する方法で、Uyenoと和歌山大学側の担当教員が共にインタラクティブに授業を行った。

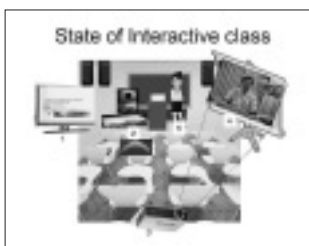


図1 リアルタイム双方向通信授業

第二の授業スタイルは、DVD視聴授業である（図2）。

あらかじめハワイ大学で収録されたUyenoの講義9回分を9回の授業教材として使用した。教室のシステム構成としては、大講義室にて既設のプロジェクターを使用し、大型スクリーンへ投影した。システム構成としては、既設のプロジェクター、スクリーン、DVDプレイヤー、スピーカー、ノートPC等である。



教室設備システム構成
1. Uyeno on screen
2. 和歌山大学側教員
3. 技術サポート員

図2 DVD視聴授業

第三の授業スタイルは面授授業である（図3）。教室のシステム構成としては、特に特別なものは使用せず、中規模講義室にて既設のプロジェクターにより、Uyeno作成のパワーポイント資料を表示した。システム構成としては、既設のプロジェクター、スクリーン、スピーカー、ノートPCである。

以上、講義においては、3つの授業スタイルを展開したが、さらに学生たちが授業中には理解しきれなかった部分を自学自習が可能なウェブ環境も整えた。このためには、「いつでも、どこでも、だれでも」が恩恵を受けることができるインターフェース、環境、技術であるユビキタスな環境として、LMS [米国ブラックボード社のWebCT]（図4）を導入し、毎回のDVDやPPT資料などを公開し、学生の利用状況等も管理した。本システムのコース作成にあたっては、システム工学研究科一回生の田中観自さんの協力を得た。



図4 LMS上に示された本講義のインターフェース例

3.2 講義の技術的改善点

遠隔授業の実践を通じて、遠隔授業に求められる技術的要素、並びに、3つの遠隔授業のスタイルについて比較を行ったが、さらに授業効果を上げるために必要と考えられる6つの技術的改善点について述べる。

第一に、毎回ハワイ大学側とテレビ会議システムを接続し、常に双方向通信が可能な状態を作ることである。このことにより、一方向的な講義スタイルを常時双方向コミュニケーションが可能な環境に整えられる。

第二に、大講義室ではなく、中小規模教室へ変更することもある必要であると考えられる。すなわち、スクリーンと受講者との間の実際の距離が縮まり、それにより臨場感を体感することができる。

第三に、プロジェクター、もしくは大型液晶モニター既設の2つのスクリーンを活用できるようにすることである。これにより、大型スクリーンによって、一方ではハワイ大学側の授業者の映像、もう一方では、補助資料を同時に確認することができる。

第四に、授業毎のDVDのコンテンツを短くし、いくつかのコンテンツに分ける。こうすることによって、長く単調になりがちな視聴環境を脱し、高い集中力を継続できる環境を整えることができる。

第五の改善点として、教室の固定化及びテレビ会議システムの常設である。今年度は、テレビ会議システムによる双方向通信授業を行う教室が固定されておらず、その都度テレビ会議システムの搬入・設置・設定・運用・撤収が必要になった。技術支援側・授業運営側の煩雑な作業の簡略化の為には改善が必要であろう。そうすることにより、より円滑に遠隔講義が行える。

最後に第六の改善点であるが、通信切断等に備え、保険システムとしてSkype等のインターネット電話システムも同時稼働させ、授業者の発言を即時にテキスト化し、テロップとして画面に表示するようにする。この体制により万が一のポリコムの通信切断があってもカバーできるし、遠隔授業のリアルタイム性を強調し、さらに受講者の印象に残る授業を展開することが可能となる。また、同時に学習者のやる気を喚起し、集中力を継続させることができると予想される。最後にICTを活用した授業開発としても理想的な形で運用できることも予想される。

4. 評価

4.1 Evaluation of the students(学生の評価)

Although it is difficult for the instructor to accurately gauge the understanding of the students, in general their written work was quite impressive given the constraints they faced. As is usual with Japanese students, their written work is at a higher level than their verbal ability. However, I do not find this to be a problem; rather, it simply reflects the fact that students have more practice with written English. If it is the desire of Wakayama University to improve the English ability of the students in this class, then I can design the material in a way that supports that goal. This would include a greater emphasis on vocabulary, especially given the many specialized terms that we use throughout the course. Perhaps we can also include a feedback component to the course, where students are required to verbally speak

their questions and submit them (as sound files, if we are not “live”) to the instructor, who can then answer them verbally as well. In this way, the student would have practice speaking and listening to English in the context of the course material.

As always, I found the students to be friendly, respectful, and eager to learn. Maintaining a good learning environment has never been a problem with Japanese students, in my experience, which can sometimes be quite different with American students!

The final essays submitted by the students displayed an acceptable degree of understanding of the material, in general. Of course, it is sometimes necessary for the instructor to “infer” what the student is saying, based on broken or difficult English passages in their writing. However, it is clear to the instructor that many of the students thought deeply about the subject matter, and were stimulated to respond with careful answers that reflected knowledge gained through the lectures.

授業者にとって、学生の理解度を正確に測ることは難しいが、レポートはかなり見応えがあったと言える。一般に日本人の学生に言えることだが、提出されたレポートは、学生達の口頭での表現能力よりもレベルが高く、このことは問題というよりは、学生達が英語の文字言語の方により習熟しているという事実を反映しているということである。和歌山大学が学生の一層の英語力向上を目指すならば、そのための教材をデザインすることが可能である。具体的には、語彙力の強化が挙げられるが、特に「ハワイの観光開発」の授業において使用される専門用語を学ぶようにデザインすることである。もう一点は、授業へのフィードバックを可能にするもので、学生が、授業者に対して、音声言語で質問をし、提出できる音声ファイルのようなものも取り入れることである。そして、授業者もまた、音声言語でそれに応じることができるのである。このようにすれば、学習者は、英語で話したり、聞いたりする実践を積むことができるだろう。

学生の態度については、彼らは常にフレンドリーで、礼儀正しく、学ぶことに熱心であった。授業者の経験から言うと、アメリカの学生とは異なり、日本の学生の場合には、良い学習環境を維持することに、何ら問題がない。

学生が提出した最終レポートは、本講座の理解の点で、一定の基準を満たしていた。もちろん、時には、学生のレポートの中で、何を言わんとしているのかを推測する必要もあった。しかしながら、多くの学生が、主題について深く考え、講義を通して得た知識に基づき、注意を払いながら、課題に取り組んでいたことが見て取れた。

4.2 学生による評価

既に述べたように、本講座は初めての取り組みであったので、受講者の学習成果を把握するとともに、講座に対する学習者の評価も把握する必要があると考えた。その方法として、システム工学部松田憲幸准教授が開発したアンケート様式を利用し、質問項目を東が考えた。また、適宜自由記述による感想を求めた。以下、DVD授業と対面授業における学生の記述を引用し、受講者の学習成果の一端を検討する。

【DVD授業（4月）】

「不安もたくさんあるけど、その分期待もたくさんあります」
「まだ耳が慣れていないため、聴くということがとても難しく感じました。自分のボキャブラリー不足にも反省しました」
「今日はハワイのことについて勉強して、英語をずっと聞きたることは集中力が必要で大変だった!!でもとてもおもしろかったのでまた楽しみ!!」

【DVD授業（5月）】

「授業の回数をこなしてきたからか、理解できる英語の量が増えてきました。次回からもこの調子で力をつけていきたいです」

【DVD授業（6月）】

「ハワイを訪れる日本人観光客は他と比べて滞在時間は短いのに、より多くのお金を落としていくので、やはりハワイの観光産業において日本は大きな意味を持つということを改めて理解しました。グラフを英語で理解するのに少し戸惑いました」

以上が4月から6月にかけてDVD授業を受講した学習者の感想を抜粋したものである。当初、英語のみで行なわれる授業への不安感を述べる学生が多かった。また英語のみの授業を受講してみた結果、自身の英語の聞き取り能力に関して、力を高める必要があると自己の英語スキルを振り返る感想も多く見られた。そして、最も多く見受けられた感想は、集中力の維持が大変であるという内容であった。5月の感想では、聞き取れる実感が出てきた様子を述べる感想が見られるようになった。さらに、6月には、講義内容に触れる感想が見られるようになった。個人差はあるものの、複数の感想を通して、このような変化が観察され、次年度の講座では、本観察を踏まえてのさらなる検証が必要であろうと考えられた。

【対面授業より】

「先生の授業はとても面白かったです。なかなか自分から質問出来なくて悔しかったです。普段から深く物事を考えられる習慣をつけたいです!! ありがとうございます」
「DVD授業と違って、ウエノ先生の表情が分かりやすく、どんな感じの話をしているか雰囲気がかみやすかったです」
「先生との質問タイムが楽しかったです。新発見がたくさん

あってもっとハワイについて知りたいと思いました」

「2回目の対面授業で、先生との親近感がわいてきました。そのため授業も理解が上がったように思いました。後半も頑張りたいと思います」

DVD視聴授業の感想から、受講者が集中力を維持することの難しさが伺われたが、3回の対面授業についての感想からは、スクリーン上の映像でしかなかった授業者Uyenoが、受講者の面前にいることによる、学習者へのプラスの影響が伺えた。まず、「面白い」「楽しい」等のことばが感想に散見された。このような感想から、2.3において、対面授業の授業者であるUyenoが述べているように、DVD授業とは異なる、対面授業でのインタラクティブな状況の下、言語と共に伝えられる話者の生の表情から、あるいは学習者が授業者に対して抱く親近感から、理解が促進されたことが推測されたと考えられる。

また授業の中の質問タイムでは、最初は質問を求められても躊躇していた学生達であったが、ある学生が口火を切ると、次第に何人もの学生が、様々な質問をするようになった。対面授業ならではの生き生きとした教師と学習者の相互交流が展開された。

以上の2つの授業形態における感想を通して、学習者の心理的な違いが観察され、学生の理解を一層高めるための授業改善の方法を探ることができたといえる。具体的には、3.2で検討した改善点の一つである、テレビ会議システム等を導入することにより、DVD視聴授業が単なる一方向の退屈な講義提供に終わらないための工夫と改善が必要とされよう。

4.3 授業者らによる授業の評価と課題の検討

「ハワイの観光開発」は、和歌山大学観光学部における初の遠隔授業であった。受講者らは、全て英語で実施される講義に対して不安を抱いていたが、殆どの学生が、好成績で本科目を履修することができた。この要因について、和歌山大学側の授業者による検討を加えたい。その結果として、「4つの要因」を以下に述べる。

さらに、次年度の講座開講にあたり、授業提供者であるUyenoと検討すべき課題が明らかになった。このことについては、講座終了後の2008年8月7日、Uyenoが愛媛県を来訪することがあり、多忙なスケジュールを調整する中で関係者がミーティングを持つことができた。以下に、討議を通じて提出された課題と、現段階において考えられる改善方法を各々3点挙げる。

【4つの要因】

- ① 本講座がDVDスタイルを中心としつつも、テレビ会議や対面授業といったスタイルの異なる授業で構成され、受講者のモチベーションがうまく引き出された。

- ② DVDでは、ハワイの観光開発の事例が具体的に上げられ、そこにはハワイの風景や統計データが豊富に盛り込まれ、視覚からも、英語で行われる講義の理解を促進した。
- ③ DVDの構成は、Lecture Overview ⇒ 本編 ⇒ Questions to Considerの3部構成となっていた。つまり受講者は何について学ぶのか全体を把握した上で、本編を視聴し、最後に学んだことを題材にしてディスカッションを行った。さらに、ハワイの事例をいかに自らの暮らす地域のツーリズムに応用するのかを考える等の機会も持つことができた。この構成が、学習者の理解を深めることにつながった。
- ④ 授業者Prof. Uyenoが日本の学生の英語力に関する十分な理解を持ち、クリアな英語により講義がすすめられた。

【課題と改善方法】

- ① DVD講義において、受講者は60分から70分間、英語漬けの状況に身をおくことになったが、学習者の感想や授業での様子から、英語を聞くことに集中力を持続することが困難であることがわかった。
⇒トピックに従って、DVDを15分から20分に再編し、DVD講義の合間にディスカッションや質疑応答を盛り込むことで、集中力の維持が可能になり、より授業が活性化されると考えられる。またテレビ会議の回数を増やし、双方向の対話を増やすことも集中力の維持につながるであろう。
- ② 本講座の内容は、ハワイ大学における102レベルの授業であった。102というのは、101と呼ばれる1回生の基礎クラスに続くクラスである。本学の学生達は、英語による101レベルの学習をスキップして102レベルの講座を受講することとなった。本学部における観光関連科目による知識の集積や、科目としての英語やエクステンションコースにおける英語学習で養われた英語力が本講座受講者の基礎力として活かされているものの、英語で観光に関する専門用語や知識を導入しておく必要性も否めない。
⇒補足的な学習の手段として利用できるような書籍の紹介をする（参照：参考文献）。さらには、Uyenoの授業「ハワイの観光開発」に準じた用語解説書等の共同開発も今後取り組むべき点である。
- ③ 授業内容の理解の促進や授業者らとの相互交流を目的として、LMSシステムを導入していたが、実際のところ、一部の受講者を除いて利用頻度が低かった。
⇒次年度は、初回授業のオリエンテーションにおいて、システム情報学センター等の施設を活用し、パソコンを使用して具体的に本システムの活用方法を指導する。授業外での自主学習を促進するため、システムへのアクセス回数を最低限義務付けるような指導も考えられる。

5. 文化的背景知識の違いにより生じる認識の差という課題

本授業では、視覚的実例が多く示された。実際の映像・写真が使われ、外国語で行われる授業の中での学習者たちの理解を助けた。しかしながら、一方では、視覚的な情報が多く与えられているにも関わらず、文化的背景の違いにより、示されている例の捉え方において、授業者が教授しようとする意図するものと学習者の理解との間にperception gap（以下、ギャップと呼ぶ）が生じることも多々見受けられた。ギャップを生じさせた主たる要因としては、以下の二点が考えられる。

- ① 例として示される物を実際に見たことがない、接したことがない等の物理的な経験の欠落
- ② 例として示される物に対して文化の違いにより生じる認識の違い

例えば、講義の中で幾度も繰り返されたアメリカの長寿テレビ番組“HAWAII FIVE-O”の引用がある。この番組は1968年から1980年まで続いたアメリカ・テレビ番組の中で最長寿を誇る番組であり、一定の年齢以上のアメリカ人であれば、それがテレビ番組であることを知らない人はほとんどいないと言っても過言ではないほどである。よって、“HAWAII FIVE-O”は、観光地ハワイの魅力を広くアメリカ国民に知らしめた番組として、ハワイの観光開発の歴史において象徴的な番組として引用されることが多い。

アメリカではそのように知名度の高いテレビ番組であっても、初めて“HAWAII FIVE-O”が紹介された講義終了後に行った確認では、“HAWAII FIVE-O”という言葉の“音”として聴き取った学習者は相当数いたものの、それがテレビ番組であり、且つアメリカのテレビ史上最長寿の番組であったが故に、ハワイの観光PRに大きく貢献し、憧れの訪問先としてのハワイのイメージ強化に多大なる影響を与えたと云うことまでを、感覚的に捉え認識できた学生は皆無であった。

また、“SUN・SAND & SEA”というハワイをイメージさせるコピーの紹介においても、同様のギャップが懸念された。“SUN・SAND & SEA”はハワイのイメージを象徴する表現として、古くから観光ポスターのコピーに、また、観光地ハワイのイメージ創りのコンセプトとして広く使われてきた。リズムカルな抑揚と共にその言葉が響くと、ハワイに生まれ育った日系3世である授業者の意識の中には、反射的に、「燦々と輝く太陽と、白い砂浜、明るいマリンブルーの海」が広がるに違いない。そして、ハワイ大学において授業者の講義を受ける学習者達も、授業者と同様にハワイに生まれ育ったか、或いは、そこに暮らしており、彼等が“SUN・SAND & SEA”から連想するものも、授業者のそれに近いものであると推察できる。

ところが、今回、授業者の講義を日本で受講した学習者

の中には、実際にハワイを訪れたことのない者が多数おり、初歩的な英単語である“SUN”“SAND”“SEA”が言葉として聴き取れてはいても、授業者が講義の中で使う表現を授業者の意図するイメージとして把握・理解することは困難と思われる場面が数多く見受けられた。以上のことから、観光学教育の今後の課題として、文化的な違いや背景知識の違いにより生じるギャップを事前に把握・確認し、そのギャップに対するきめ細かい対応策の確立が必要である。

ケース①の場合、その授業で使われる事例の中から、文化的な違い、背景知識の違いにより理解が難しいと考えられるものについては、授業に先立ち、学習者に対して補足的資料や説明を与えることで、授業内容の理解を大きく促すことができると考えられる。

また、ケース②へは、以下のアプローチが考えられる。同じ「太陽と砂と海」という言葉を聞いても、ハワイに生まれ育った人の描く「燦々と輝く太陽と白い砂と真つ青な海」のイメージとは違い、日本に生まれ日本海に面した北陸の街に育った者には、「真冬の北風に舞う雪砂にどんより曇った太陽と灰色の海」という日本の原風景としてのモノトーンの美しいイメージが先行する可能性があることに対する授業者の理解を図り、その上で、教授者の意図する内容を日本の学習者に理解・把握させる為に必要なアプローチを、こちらから積極的に提案し、示してゆくことが不可欠である。

この授業により、文化の違いから生じるギャップ（物事の認識・受け止め方の違い）を検証し、その克服方法を模索することは、海外から日本を訪れるインバウンドの観光客数増加を図る戦略として観光庁が掲げる「憧れの地・日本」のイメージづくりの一端を担い、日本の魅力を外国人に効果的に伝達する方法の確立に貢献することにもつながるのである。更に、授業を通して学習者に文化的背景知識により生じるギャップの存在を実感させることも、この授業における一つの目的として掲げ、その状況・事態を意図的・意識的に観光教育に活用してゆくべきである。

それは、単に「ギャップを埋める」ということではなく、文化の違いによるギャップが人の意識の中にどう生じ何を引き起こすのかという深みまで掘り下げ、その感覚を掴ませることで、外国語による遠隔授業に新しい側面と意義を与えることが可能となる。つまり、観光教育としての外国語による遠隔授業においては、観光分野への貢献はもちろん日本独自の観光学確立への一歩を担うと云う意識の下、受け身を脱し、より積極的な関わり方を模索することを提案する。

6. まとめにかえて

本稿では、観光学部において初めての取り組みである遠隔授業「ハワイの観光開発」の実際について可能な限り詳細に記述し、授業者らがそれぞれに担った役割を遂行する中で明らかになっていった課題を提示し、改善点を検討した。

この結果が、今後も開設されるであろう外国語による遠隔授業の礎となると考える。

学生達にとっては、ハワイ大学旅行産業経営学部教授の講義を受けることにより、観光先進国の事例から多くの学びを得、それを踏まえて、和歌山あるいは学生自身の出身地の観光産業について考える機会となった。また外国から日本にいる学生に向けて外国語で行われる遠隔授業において、言葉の壁だけでなく文化の壁という問題が生じることを体験し、言葉・文化の違いから生じる「ギャップ」が存在することを認識できたであろう。将来、観光産業や観光研究等に携わってゆく可能性の高い学生達にとって貴重な学びとなったであろう。異なる文化背景を持つ多様な国の人々に日本の文化や伝統を始め、日本の魅力を伝える際に、外国語による遠隔授業で培った経験を活かし、即戦力としての活躍が期待できるよう。

その成果は、2009年2月16日から3月15日の一ヶ月に渡り実施された第一回観光学部海外インターンシップ—ハワイ・プログラムにおいて既に顕著となった。研修参加者6名中の3名は本科目の履修者であった。ハワイ研修には、Uyenoら、ハワイ大学旅行産業経営学部教授陣による観光に特化した英語の授業も実施された。参加者らは、「ハワイの観光開発」で学んだことを本インターンシップに活かし、期待通り本科目履修の結果を前向きに反映する成果を報告してくれた。

最後に、和歌山大学観光学部における「外国語による遠隔授業」を、我国の目指す「観光立国」、そして、観光庁の掲げる「憧れの地・日本」のイメージ構築に寄与する形での観光教育モデルとして育てる所存であることを記しておきたい。

謝辞

本科目の開設にあたり、平成20年4月16日、琉球大学観光産業科学部観光科学科の大島順子准教授を訪問し、遠隔授業およびテレビ会議に関する多くの有効な情報を頂戴しました。記してお礼申し上げます。

参考文献

- e-learning を通した国際コミュニケーション教育推進プロジェクト
(2008)「e-learning と国際コミュニケーション」
Roy A.Cook,Laura J. Yale, Joseph J. Marque (1999) Tourism:The Business of Travel and Atlas World Geography Package
辻, 義人; 田島, 貴裕; 西岡, 将晴; 奥田, 和重 (2008)『異なる背景を持つ受講者の遠隔教育に対する評価観点の検討- 遠隔サイエンス・コミュニケーションの実現に向けて-』
<http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/bitstream/10252/1420/1/CIEC25.pdf>

受付日 2009年2月3日

受理日 2009年3月23日